

歴博 くらしの植物苑だより

第107回くらしの植物苑観察会 2月23日(土)

浜のくらしと植物

江口 誠一(千葉県立中央博物館)

九十九里に広がる風景のできかた

九十九里浜低地は、千葉県の太平洋に面した旭市から一宮町の、総延長約60kmに及ぶ海浜をもつ低地帯です。この地域では、砂堤と呼ばれる帯状の高まりが、海岸線と平行に列を成しており、その間に堤間湿地があります。砂堤には集落や畠が、堤間湿地には水田がそれぞれ広がっており、地形に応じた土地利用がみられます。この風景がどのようにしてできたのか、時代を追ってみたいと思います。

内陸側に接する下総台地から太平洋まで、直線距離で約10km続く砂堤と堤間湿地の連続は、全体の高低差わずか約10mしかありません。この広大で平らな土地は、縄文時代に海水準が上がった時に、海の底だったことによって形づくられました。縄文時代前期・中期になると、台地の縁からのびる砂州が発達し、現在もっとも内陸側に並ぶ、第Ⅰ砂堤群の基礎が出来上ります。そのころの下総台地と砂堤の間の、湿地あるいは堤間湿地には、海水が混ざる潟湖もありました。

縄文時代後期・晩期には、最大幅約5kmの大型で連続性のよい、第Ⅱ砂堤群がつくられます。他の砂堤群より立派なのは、この時期に海水準が急に

下がったこと、地震で地盤が急に上がったこと、北の屏風ヶ浦や南の太東崎から、沿岸流によって流れ着く土砂の量が増えたことなどが、理由に挙げられています。また堤間湿地も、汽水から淡水の沼沢地となり、現在の環境に近くなりました。

最も海側の第Ⅲ砂堤群は、古墳時代以降にできます。その中央部の海から2kmほどに、途切れながらも連なる砂堤列には、現在岡集落が形成されています。中には古代・中世、すでに人が住んでいたと思われる所もありますが、近世以降イワシ漁をめぐる拠点として、大きく発展しました。一方、その豊漁期の度に、漁の最前線として海辺に形成されるのが納屋集落です。不漁期に停滞する間、沿岸流などで運ばれる土砂で海岸線が埋め進み、来たる次の豊漁期、新たに納屋集落がつくられてきました。よって、現在の集落の列から、当時の海岸線の様子を想像することもできます。また、堤間湿地の新田開発によって、かつての納屋集落が新田集落に変化した地区もあります。

このように縄文時代前期・中期以降、段階的に海岸線が海側へ移動することで、多くの砂堤列が形成されてきました。その過程は、環境変動に大きく左右され、人々もその中で開発をしながら、土地利用を行ってきました。しかし近年、海食崖の侵食防止工事などの影響で、土砂の需給バランスが変化し、砂浜が後退している場所もみられます。

なお、この地域に関する展示が来月下旬より、私の所属する博物館で開催されます。タイトルは「砂浜の野鳥たち—九十九里の景観とともに—」です。どうぞご期待下さい。

次回予告

第108回くらしの植物苑観察会 2008年3月22日(土)

「古代のウメとサクラ」 仁藤 敦史 (国立歴史民俗博物館)

13:30～15:30 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料